〔プレス・リリース〕

日本民藝館改修記念 名品展Ⅱ
近代工芸の巨匠たち

2021年7月6日(火)－9月23日(木祝)

〔上段左より〕白地草花文長角鉢　河井寛次郎　1939年　幅23.8㎝／飴釉筒描皿　濱田庄司　1931年　径17.8㎝／〔中段〕式場隆三郎編「バーナード・リーチ」 型染装幀・芹沢銈介　1934年／ガレナ釉櫛描柳文楕円皿　バーナード・リーチ　1952年　長33.4㎝／「工藝」第101号版画装幀・棟方志功　1939年／〔下段〕辰砂菱花文鉢　河井寛次郎　1941年　径21.0㎝／海鼠釉紋押鉄絵角皿　濱田庄司　1944年　幅20.5㎝

日本民藝館
https://www.mingeikan.or.jp/

展覧会のみどころ

○近代陶芸史に大きな足跡を残したバーナード・リーチ、河井寛次郎、濱田庄司の作品を一挙公開。そのほか富本憲吉や金城次郎、染色家の芹沢銈介、版画家の棟方志功、木漆工芸家の黒田辰秋の作品など、創設者の柳と関わった錚々たる近代工芸作家たちの作品をご覧いただけます。

○ 2021 年に日本民藝館の本館と西館が、「民芸運動の活動拠点として建てられた我が国の文化史上価値のある建物」「柳自身が基本設計を行い氏の思想が体現された都内に唯一残る建物」として、東京都指定文化財に指定されました。時の流れを感じる木造建築の魅力も見どころの一つです。

○ 1936 年設立当時の意匠に合わせ、大展示室が 2021 年 4 月にリニューアルオープンとなりました。当時の雰囲気を受け継いだ新しい空間で、まさにこの場所で活躍してきた工芸作家たちの作品の魅力を体感できます。

大展示室改修のポイント

今回の改修工事における基本的な方針は、柳宗悦の構想によって作られた日本民藝館の建築空間を、出来るだけ創建当時の姿に近づけること。本館二階と新館二階を結ぶ回廊には旧館に漂う和の雰囲気を継承。新館大展示室の床面には、かつてのように栃木県産の大谷石を敷き詰め、壁面には静岡県産の葛布を貼り、1936 年の開館当時の雰囲気の再現を目指した。

1936 年設立の本館外観。基本設計は創設者柳宗悦によるもの。

1982 年まで使用された大展示室〔1938年・呉州赤絵展〕。

大谷石の床面と葛布の壁面による改修後の大展示室。右側は新設展示ケース。

図版解説

Ⓐ 出品作品より バーナード・リーチ、河井寛次郎、濱田庄司、芹沢銈介、棟方志功作品

バーナード・リーチの楕円皿（中央）は、化粧土を使って装飾したイギリスの伝統的な焼物・スリップウェアの技法を応用した作品と言えるが、柳文は一般的なスリップウェアに見られる化粧土で流し描く方法ではなく、櫛描で描かれている。セント・アイヴスのリーチ工房で 1952年10月に制作されたもので、この年の 9 月から 10 月にかけて柳はリーチのもとに滞在していたため、窯出しに立ち合って入手した可能性もある。

書籍「バーナード・リーチ」（中左）は、リーチが 34 年に 14 年ぶりに来日した際の出版で、表紙は芹沢銈介による型染布。内容はリーチの著述、作品、リーチ研究などをまとめたもので、736ページに及ぶ 610 部刊行の限定普通版である（特定版はリーチによる装幀）。「工藝」（第101号、中右）は、柳が主に編集した雑誌で、表紙は毎号工夫が凝らされた。この号は棟方志功による版画で、1,000 部の刊行。落ちついた色調を得るために棟方が頻繁に用いた、裏彩色の技法が用いられている。

河井寛次郎による白地の角皿（左上）に描かれるのは、辰砂と呉須、鉄による草花文。辰砂の丸皿（左下）は、皿全面に広がるように描かれる菱花文で、ともに河井の代表的な意匠である。型による作品が多い河井だが、この丸皿のような轆轤による作品も制作している。

濱田庄司の丸皿（右上）は、イギリスのスリップウェアの技法を取り入れながら、拠点とした益子の陶土で制作された。全体に化粧掛けをし、筒描で文様を描いた後、釉を掛けて焼成されている。角皿（右下）は型で成形されているが、器形は古陶磁の「色絵仙境文角皿」（日本民藝館蔵）を範としたと考えられ、その器形に鉄絵で濱田オリジナルの糖黍文を施している。

Ⓑ 楽焼葡萄文蓋付壺（らくやきぶどうもんふたつきつぼ）

バーナード・リーチ　1913年　25.6×24.3cm

リーチが陶芸を始めた最初期の作品である。低下度焼成の楽焼で、成型後に線彫りで模様を表した後に絵具を塗って装飾している。同形同模様のものが 3 個ほど制作され、一つをリーチが所持し、リーチとともに陶芸を学んだ富本憲吉と、そして柳にそれぞれ贈られたという。

〔バーナード・リーチ〕

1887-1979。香港生まれのイギリス人で、幼児期は日本で過ごす。ロンドン美術学校などでエッチングを学び、1909年再来日。エッチングの入門をした柳宗悦ら白樺派と親交を結ぶ。11年に六代目尾形乾山に富本憲吉とともに入門、作陶を始める。20年濱田庄司を伴い帰英、コーンウォール州セント・アイヴスに日本風の登窯を築き、22年にはリーチ工房を設立し生涯の拠点とした。西洋と東洋の陶技を融合させた作風が特徴。

Ⓒ 辰砂草文湯呑（しんしやそうもんゆのみ）

河井寛次郎　1925-28年　6.6×7.8cm

辰砂で草文を描いた揃いの湯呑の一つで、柳が日常で使用していた作品である。用を目的とする簡素な作風へ一変させた頃の河井作品で、器形は1926年に柳らが発表した「日本民藝美術館設立趣意書」に掲載された、江戸時代の伊万里焼「染付羊歯文平猪口」を範としたと考えられる。

Ⓓ 焼締黒流水注（やきしめくろながしすいちゅう）

濱田庄司　1924-28年　21.1×22.0×19.2cm

流掛は日本の民窯で多用された技法で、釉薬が流れ落ちるという自然の力を活かした、偶発性の強い技法である。濱田が作陶の拠点とした益子に移り住んで間もない頃の作品で、流掛の技法は後年濱田が得意とした流描の技法に発展する。

Ⓔ 色絵薊葉文角皿（いろえあざみはもんかくざら）

富本憲吉　1936年　5.2×28.4cm

「模様から模様を造らず」を信条とした富本は、羊歯文や四弁花文など独自の文様を生み出した。本作は二枚の薊葉が主文様の、上絵技法による角皿。四周を赤の斜格子で埋め尽くすのは上絵を安定させる効果もあり、古九谷の技法に学んだもの。石川県・九谷焼の陶芸家北出塔次郎の窯で制作した皿で、富本により当館に寄贈された。

〔河井寛次郎〕

1890-1966。島根県安来市生まれ。1910年に入学した東京高等工業学校（現・東京工業大学）窯業科で、2 年下級の濱田と交わる。卒業後は京都市立陶磁器試験場に入所。20年、五条坂に鐘渓窯を構える。東洋古陶磁の技法を駆使した雅やかな作品が好評を博すが、次第に自らの仕事に疑念を抱き、濱田を介して柳と親交を結ぶや作風を一変。型作りによる簡素で重厚な形状と、色鮮やかな釉薬、躍動感あふれる文様が施される。

〔濱田庄司〕

1894-1978。神奈川県川崎市生まれ。1913年東京高等工業学校窯業科に入学、上級の河井と親交を結ぶ。卒業後は河井と同じ京都市立陶磁器試験場に入所。20年リーチに伴い渡英、セント・アイヴスで作陶。帰国後は栃木県の益子へ居を移して活動の拠点とした。益子の土と釉薬を用いた作品が多く、流掛や赤絵、塩釉などの技法や、糖黍文様を施した作品は力強く健康的である。55年に第 1 回重要無形文化財保持者に認定。

〔富本憲吉〕

1886-1963。奈良県生まれ。東京美術学校（現・東京藝術大学）図案科在学中から英国に留学、ウイリアム・モリスらの工芸思想を具現化した仕事に触れる。帰国後バーナード・リーチと親交を結んで自らも作陶を始め、古陶磁研究を踏まえながら、楽焼、本焼、磁器、染付、色絵、金彩、銀彩といった陶技を次々に展開。1955年には「色絵磁器」で第 1 回重要無形文化財保持者に認定される。

Ⓕ 萬朶譜　梅の柵

棟方志功　紙本墨摺　1935年　42.6×39.6cm

1936年に国画会に棟方が出品した「大和し美し版画巻」は、柳や濱田に注目され日本民藝館が購入、開館展「現代作家工藝品展覧会」に出品された。本図はその一年前の国画会出品作「萬朶譜」のうちの「梅の柵」。萬朶とは花々を一杯につけた草木、といった意味だが、木版の墨わずか一色で、「萬朶」の梅が見事に表現されている。

〔棟方志功〕

1903-1975。青森県青森市生まれ。1924年画家を志して上京するが、26年川上澄生の版画（42年以降、棟方は「板画」と表記）に感銘を受け、油絵画家から版画家へと転向。36年、国画会の出品作「大和し美し版画巻」が柳や濱田に注目され、開館を控えた日本民藝館の買い上げ作品となる。以後柳、濱田、河井らとの交流が始まり、作品制作にも多大な刺激を受けていった。

〔芹沢銈介〕

1895-1984。静岡県静岡市生まれ。1916年、東京高等工業学校図案科を卒業。柳宗悦の独特な工芸論と琉球紅型の美しさに感銘して染色家になることを決意する。紅型と和染に学び、図案・型彫り・染めまでを一貫して行う「型絵染」の技法を生み出し、明るい色調と明快な文様を特徴とする作品を数多く生み出した。

Ⓖ 笹牡丹唐草文帯地（部分）

芹沢銈介　紬、型染　1935年

笹文と牡丹文は、型染という一連の工程（下絵を型紙に張って型彫し、糊防染した後に色差しして染め分ける）を経て、単純化されながらも笹と牡丹の要素が凝縮した見事な文様へ転化されている。芹沢の型染技法は、1956年に重要無形文化財に認定された際、分業制の伝統的な型染に対し、芹沢の型染が意匠力に富んだ一貫制作であることから「型絵染」と命名されている。

Ⓗ 朱漆三面鏡

黒田辰秋　1928年　180.5×120.0×38.0cm

黒田辰秋の初期の仕事の一つで、京都で活動した上加茂民芸協団時代の作。上加茂民芸協団の最初の大仕事は、1928年に上野で行なわれた大礼記念国産振興東京博覧会に出品された建物「民藝館」の家具調度類であったが、博覧会終了後大阪に移築されるにあたり追加制作された鏡台である。

〔黒田辰秋〕

1904-1982。京都府生まれの木漆工芸家。漆芸界での分業制に疑問を持ち、制作から塗りまでの一貫制作を志す。河井寛次郎や柳宗悦らに影響を受けて1927年に上加茂民芸協団に参加。京都の老舗菓子舗「鍵善良房」をはじめ、京都の注文主の支えのもと活動。70年に木工芸における初の重要無形文化財保持者に認定された。

広報用画像データのお申込みについて

右の注意事項をお読みいただき、

- 御社名
- ご担当者名
- ご住所
- 連絡先電話番号
- E-mail アドレス
- 媒体名
- 掲載予定日
- 発売日

をご記入の上、ご希望の画像を FAX または E-mail にてお申込み下さい。

〔FAX / E-mail 返信先〕
日本民藝館 学芸部
FAX：03-3467-4537
担当：古屋、白土
furuya@mingeikan.or.jp
shirato@mingeikan.or.jp

〔注意事項〕

- 画像の使用目的は、ご記入いただいた媒体上の本展紹介記事に限ります
- 画像にはキャプションを必ず表記して下さい
- 画像を第三者に渡したり、作品部分のトリミング、文字載せはしないで下さい
- 使用後の画像は消去して下さい
- 当館での確認用に、必ずゲラ刷りの段階で、原稿を左記 FAX / E-mail 宛にお送り下さい
- 掲載いただいた場合、お手数ですが掲載紙（誌）をお送り下さい

本展に関するお問い合わせ先：
日本民藝館　学芸部　白土（しらと）　03-3467-4527